

令和6年度第3回総合教育会議 会議録

1. 開催日時 令和7年2月18日（火） 16:00～17:15

2. 開催場所 西条市庁舎本館5階大会議室

3. 出席者 【構成員】

西条市長 高橋 敏明

教育長 青野 信樹

教育長職務代理者 福田 亜弓

委員 磯 恒子

委員 鳳 慶洲

委員 一色 一成

【構成員以外】

経営戦略部長 高橋 雄次

経営戦略部副部長兼政策企画課長 菅 裕臣

秘書課長 前谷 浩教

市民生活部長 越野 美智子

人権擁護課長 寺川 友朗

教育委員会事務局長 串部 佳隆

教育指導監 黒河 幸彦

教育総務課長 白石 元

学校教育課長 村上 彰彦

学校教育課主幹 莖田 篤史

学校政策課長 渡部 宏樹

学校政策課主幹 吉岡 健二

学校教育課副課長 玉井 卓司

教育総務課専門員兼教育総務係長 田口 剛洋

【事務局】

政策企画課副課長兼政策企画係長 三村 大樹

政策企画課政策企画係副主査 篠原 彩

4. 市長挨拶

本日は、お忙しいところご出席賜り、誠にありがとうございます。時代を担う子どもたちをしっかりと育て、人間作りをしていくためには、教育が大切であり、子どもたちの育成は本市の発展に非常に重要であると認識している。本日の会議では、報告事項1件、協議事項2件となっており、西条市教育大綱と学校規模適正化・適正配置についての話をさせ

ていただく。委員の皆様からもご意見をいただき、一緒に進めていきたいと考えている。限られた時間ではあるが、活発な意見交換の場となるように進めていきたいと思っているので、どうかよろしくお願いしたい。

5. 報告

(1) 西条市教育大綱（案）にかかるパブリックコメントの結果について

【経営戦略部長・事務局から説明】

西条市教育大綱（案）にかかる意見及び回答（資料1）のとおり

《質疑》

一色委員 パブリックコメントは全部で7件だったのか、それとも抜粋しているのか。

政策企画課長 意見として提出があったのは全部で7件である。

礒委員 1番目の方の意見について、私が思うことを述べさせていただく。まずは給食の件について。意見の中に「無理やり食べさせ、給食嫌いな子が出ます。」とある。昔は残食ゼロをクラスで競争することもあったが、今の学校では無理やり食べさせることはしていない。苦手なものは事前に戻し、他の児童・生徒に食べてもらうなどの対応を取っている。子どものアレルギー等にも対応し、お弁当を持参して食べることもできる。栄養士の方々も食事中見回っており、どの学校も気持ちよく給食の時間を過ごせていると思う。

次に「学校に対してクレームもなくモンスターペアレントはでません。」について。これは確率の問題であり、大規模校のように、児童・生徒の数が多ければ、そのような方も多くなるかもしれない。しかし、小規模校では、先生一人がすべてに対応しなければならず、保護者や子どもと向き合う時間を確保することが非常に難しい。ある程度の規模の学校では主任や副担任と相談できるが、小規模校ではそれができない。問題が起きた場合、家庭訪問をするが、一人より二人で訪問した方が良いと言われているが、教員がいないので、こじれた場合は修復困難となりかねない。私は、教員時代に小規模校の経験はしていないが、教員仲間から話を聞き、とても大変だと常々感じていた。色々な側面があり、一概に小規模校が良いとは言えないと思っている。

最後に授業について。「人間性も学力も上がるのが小規模校です。」と意見されているが、不確実な世界に生きる子どもたちの学力を身につけることが大切だと思う。そのために、教員は教材研究を行い、ペアやグループ等の指導形態で話し合う活動を取り入れるなど様々な工夫をしている。グループ活動を通してお互いを認め合い、学び合うことも大切である。また、「小規模校の教師が2学年3学年持つのが大変だということはどうぞです。」とあるが、小規模校でも様々な仕事があり、文書作成等にも多くの時間がかかる。また、児童・生徒

数は少なくとも1人の教師で倍以上の教材研究と授業準備をしなければならない。6時間授業だとさらに大変になる。もちろんマンツーマンでの教育は素晴らしいと思うが、小中学生は成長過程の子どもであり、発達段階に合わせた多様な教育・指導を行った方が、子どもの心に残る授業ができるのではないかと考えている。

福田委員 6番目の意見、英語教育について。教育委員会としては、ALTの人数を倍増し、グローバル社会を生き抜く人材育成のため英語教育を推進していきたいと考えているので、市長部局にもお力添えいただきたい。

市長 ありがとうございます。国際化は、教育の中でも重要なツールであり、特に、本市がこれから力を入れていきたいと思っている分野でもある。

教育長 先日、神拝小学校のALTの授業を市長に見学いただいた。子どもたちが楽しんで授業を受けている様子を見ていただいて、子どもたちだけでなく市民の方とも関わりが持てるようなことができたらいいいのでは、というご意見をいただいた。子どもたちはもちろん、市民にもこの取組が広がればと考えている。

6. 協議

(1) 西条市教育大綱の策定について

【経営戦略部長から説明】

西条市教育大綱（案）の策定経過を説明（資料2）

《質疑》

鳳委員 教育大綱を見せていただいた。前回の教育総合会議から協議を重ね、その際に出た意見等も反映されており、大変しっかりした大綱になっていると思う。

(2) 西条市の学校規模等適正化について（資料3）

【学校政策課長から説明】

- ・全7回の会議を経て、1月22日に答申書の提出があった。
- ・「令和4年度に実施したアンケート結果や、国、他自治体の状況からも、学校が一定規模にあることが認められる」とされる一方、現実的な課題の優先解決や小規模な学校への配慮なども示された。
- ・教育委員会としては、答申や本日の会議の内容を踏まえ、今後も学校規模等適正化の取組を推進していく。

(適正化計画案のポイント)

- ・ 適正化の優先課題を設定し、今後 10 年間で、小学校では複式学級の解消、中学校では学年単学級の解消を目指す。
- ・ 旧行政区の中学校区単位を目安として、必要となる学校規模を形成するため、統廃合による学校再編を行う。
- ・ 丹原地域での小規模特認校や西条地域での小中一貫教育など特色ある教育の展開についても検討を行う。

《質疑》

市長

教育委員会事務局から、学校規模適正化のこれまでの経緯や今後の方針等について説明させていただいたが、このことについて私の考えを述べさせていただきたい。これまで小中学校規模適正化について協議を重ねていただき、審議会関係者の皆様には、これまでのご尽力に対し心から感謝申し上げる。

私は大学教員の経験があり、その視点からいくつか意見や感想を申し上げたい。市民が、健やかで幸せあふれる生活を送っていくため、西条の将来を担う子どもの教育に関する問題は本市の最重要課題の一つであると認識している。現在、小中学校の教育においては、子どもの登校拒否、いじめや自殺の増加、教職員の過重労働によるストレスの増大など、喫緊の課題が山積している。本答申では、小学校における複式学級の解消が最優先とされる一方、別のアンケート調査では、教育の質の向上には有効であるとの意見もあった。大学教員時代の話になるが、ある学年のゼミ生 3 人のうち 2 人が、小学校の時に複式学級を経験していた。その学生に当時の感想を聞くと、上級生と一緒に勉強でき、学習を早く進めることもできて、楽しく充実していたとのことであった。このことから、小学校において複式学級を必ず避けるべきかどうか、再検討の余地があるものと考えている。

小中学校の教育について、市民の声をしっかりと聞くことが重要であるが、今回、たたき台として再編の可能性を指摘された小学校区においては、答申案の付帯意見として提示されたように、該当する校区の様々な立場の方が参加する協議会を立ち上げ、協議していくことが望ましいものと考えている。その際、小中学校を少人数のまま維持していく場合と再編する場合のそれぞれの長所と短所を提示した上で、十分に時間をかけて意見交換をすることが大切である。いずれにしても、地域の皆様の意見をしっかりと聞き、ICT やデジタル教材の活用、教育支援員の増加など、刻一刻と変化する教育環境を考慮した上で、慎重に検討していくことが望ましい。場合によっては、今後 1 期は 10 年先と目標を設定しているが、期間を延長、もしくは再編について再度検討することも十分あり得ると考えている。

また、県内他市町で実施されている校区外での通学を許可する特認校制度の活用は、様々な特色を持つ子どもの不登校を減少させることが期待でき、小規

模校を中心に見直しを考慮するべきだと考えている。この学校規模等適正化の背景としては、小規模校での教員の負担増や児童・生徒数に対しての経費負担の増大が挙げられる。ICT教育の活用や、コミュニティ・スクールの一環として、学外からの教育支援員を増員することで、教員が教育指導に時間を取れるようにすることが必要と考えている。また、経費負担に関しては、さらに教育関連予算を増やすことが必要となるため、歳入増を目指して、産業の活性化、企業誘致等にしっかりと取り組んでいきたい。また、当該小学校OBに対して、寄附金を募ることも手法として考えられる。特に、市外にお住まいのOBに統廃合の可能性があることを明示し、教育支援員の経費を含め、多用途に活用できる資金を得ることも方法の一つである。

現在の学校教育を取り巻く問題は、子どもの心の問題や自殺の増加、登校拒否、教職員のストレス増大による離職や教員不足、教育の質の向上や部活動のあり方など、非常に多岐にわたる課題が存在している。このような課題を踏まえ、「小中学校の教育のあり方審議会」のようなものを新たに立ち上げることも選択肢として考えたかどうかと考えている。

議委員

教育は、学力、知識、技能を身につけるだけでなく、生きる力、将来生き抜く力を付けるためのものでもある。たとえば、国語では何が必要か、理科なら何をするか、教員はそれを考えながら授業を進めている。知識だけでなく、児童・生徒同士のペアワークで何を話し合うか、この教材で何を身につけるか、仲間との話し合いを通して学び合うこと、それにより友達の良さや気づきを得られることを重視して授業をしている。これらのコミュニケーション能力や社会性を身につけることが発達段階にある小中学生にとって最も大切なのではないかと感じている。

市長

複式学級が良いか悪いかという結論は簡単には出ない。それぞれの良さがあり、どちらが良いとも言えない。答申で気になったのは、複式学級を解消することを大きな目的として掲げている点である。人口動態は流動的であり、学年によっては複式学級になる年もあるし、そうでない年もあるだろう。複式学級であっても、必ずしも一人というわけでもない。複式学級がダメだという前提で進めていることに疑問を感じる。

議委員

子どもの能力には個人差があり、学力優秀な子もいれば、そうでない子もいる。様々な子どもがいて交流するからこそ、内面的な成長が促される。教員の立場から、子どもたちに教えたいたくさんあるが、それ以上に、社会で役に立ち、立派に育つ力を育むことが大切だと思っている。社会性は集団活動により身につくものである。例えば、友達と切磋琢磨して合唱に取り組み、みんなで一致団結して声を合わせて高め合い、クラス全員でやり遂

げた時に感じる達成感や満足感。この時にしかできない貴重な経験であり財産である。この経験は、将来社会に出ても役に立つ。友達や仲間との学びは、学校生活の中で一番大切なことだと思っている。

市長

ありがとうございます。もちろん小規模校だけですべてが完結するわけではないと認識している。例えば、小規模校と近くの学校が連携し、合同授業などを通してコミュニケーションを築くなど、様々な工夫が必要になるかと思っている。社会に出れば同級生ばかりではないので、これらは、小さな社会人の経験となるのではないだろうか。大規模校の30人前後のクラスも素晴らしいが、小規模校にも良さがある。個人的には、子どもの時に全てを与えすぎるのは良くないと思っている。良い条件ばかりを与えていると、社会に出て伸びる素地を削ってしまうこともあるかもしれない。足りないものを工夫して解決しようとする力は、社会に出て活かせることもあるだろうと思う。

一色委員

3点質問をさせていただきたい。①今回の答申の内容で市長が気になった点を教えていただきたい。②今回の答申の内容は、学校再編の検討材料としていただけるのか。③どのような教育環境を目指していくのか。

市長

①について。地域別適正化計画（案）は、年次を分けて10年計画としているが、現時点ではっきり分けることができるのか疑問に感じている。教育分野はどんどん変化している。最近では、デジタルやICTを含め状況が絶えず変化しており、文部科学省の学習指導要領も改訂された。人口動態も経済情勢やお住まいの地域によって変わってくる。例えば、一つ工場がその地域にできると、副次的にアパートやマンションが建つことも想定される。その場合、人口動態が適正かどうかという問題が出てくる。統廃合が関係する地域の場合は、すぐに結論を出さず、地域の皆様の声をしっかりと聞くことが大切だと思っている。

②について。一年間検討した結果の、一つの案として参考とさせていただきたい。しかし、すべてが答申案のとおりになるかといえば、現時点では未定である。私自身は学校の統廃合は避けたいと考えており、そのために尽力していきたい。

③について。昨今では、ICT教育が積極的に取り入れられており、優秀な先生が複数の授業を同時に行うことが可能となってきた。本市は以前からICT教育に力を入れ、先進的な取組を行ってきた。今後はさらにこの流れが加速していくと考えている。そして、教員不足を解決する方法の一つとして、学外から教育支援員を迎え、教員の負担軽減につなげていくことも検討している。

福田委員

学校規模の適正化について長期にわたりご尽力いただき、貴重な答申をまとめてくださった審議会委員の皆様に感謝申し上げます。この答申は結論を押し付けるものではなく、地域や保護者、学校現場の声を丁寧に拾い上げ、子どもたちの未来を見据えたたたき台である。市長は町の未来を担う子どもたちの教育環境を常に温かく見守ってくださり、心強く感じている。複式学級と単学級の話があったが、教育効果について、市長は学力向上や個性育む側面を評価されており、私もその点は一理あると感じている。しかし、現場の教員からは、指導の難しさ、教員の負担増、児童・生徒が多様な関係性を築く機会を得るには、一定規模の集団が必要という声も多い。この点について、市長としてどのようにバランスを取っていくのかお聞きしたい。

市長

小規模校が中大規模校より優れている訳ではない。今後の学校の管理・運営は、教員だけでなく、学外からの協力・サポートを受けられる体制の構築が必要となる。そのために、一定のカリキュラムを受講いただき、資格を取得した方に、学校のサポートに入っていただくような形にしてはどうかと考えている。これには費用が発生するため、行政はその財政的な支援を行う。そして、「小中学校の教育のあり方審議会」のようなものを新たに立ち上げ、喫緊の課題への方策を検討いただきたいと願っている。

福田委員

地域の力を活用して教員不足を補う取組は素晴らしいことだと思う。特に市長が目指されている「地域とともにある学校」の方向性には多くの共感があると感じる。しかし、長期的に見た場合、地域の担い手が減少するリスクも考慮する必要があるため、様々な面から検討いただきたい。さらに、企業誘致の話もあり、税収増を教育財源に充てる市長の強いビジョンに期待しているが、その成果が表れるまでにも、日々、教育現場は難しい課題に直面している。そして、子どもたちは今この瞬間にも成長しており、私たち大人には待ったなしの大きな責任がある。教育は、今の大人の考えを押し付けるのではなく、未来を生きる子どもたちにどれだけの可能性を与えられるかが問われているのではないかと考えている。学校規模適正化という言葉は、ただ学校を減らすと捉えるのではなく、子どもたちの未来をどれだけ広げられるかという視点で、もう一度考えていただけることを願っている。私は、子どもたちのために最善の道を模索する対話を続けていきたいし、学校規模の適正化を進めていきたいという思いがある。

教育長

小中学校で仕事をしてきた者として、学校に対する想いを述べさせていたきたい。学校は、各教科の学習をする場だが、それ以外にも様々なことを学べる場である。友達の多様な意見に触れて自分の考えを見直したり、切磋

琢磨することで学力や学習意欲が向上したりする。友達と活動することでコミュニケーション能力や社会性が身につく。ただ、何よりも心に残るのは、運動会や文化祭などの行事を、友達と協力して成し遂げた時の達成感や充実感である。教え子たちの同級会に呼ばれることがあるが、そこで教え子たちが話すのは、ほとんどが友達との思い出話である。小中学校時代に多くの友達と知り合って様々な体験をすることは、一生の財産になる、何歳になってもそれは変わらないのだと感じている。そう考えると、一定規模の学校は、子どもたちにとってメリットがあるのではないかと思うし、教育環境として学校を考えていくのであれば、適正規模の学校はマイナスな環境になることはないと感じている。審議会からの答申を踏まえ、地域の意見を聞きながら今後も検討を進めていきたい。

鳳委員

子どもたちは非常に柔軟で、どんな環境にも適応できる力がある。しかし、より良い教育環境と子どもたちの選択肢を増やせる仕組み作りは必要不可欠である。大切なのは現在とこれからのこと。子どもたちの未来のために、一步一步進めていきたいと思う。

市長

ありがとうございます。皆様から様々なご意見をいただきました。

7. その他

一色委員

全ての物事に関係することだが、私が非常に大切にしていることがある。今、目の前にある全てのものは、誰かのためを思って、誰かの役に立つだろうと考えて作られたものであふれている。そういったものは、今、この瞬間に作られたものではなく、未来を想像し、その時にこういうものがあつたらいいなという願いが込められていると認識している。今回の話に関しても、我々が幼い頃に教育を受けていた環境、その環境は、色々と考えられた上でその時代があつたということで、私は非常に有意義な学校生活を送らせていただいた。今、話し合うべきなのは、これからの子どもたち、大人になる子どもたちの未来を思い、考えていく必要があるのではないか。ぜひ、皆様とともにそのような方向性で話し合いを深めていきたいと考えている。

礒委員

コミュニティ・スクールは非常に大切な取組であり、今後もぜひ推進していただきたいが、これをもって教員不足の解消を目指すことは難しいと思っている。教員採用試験に合格して、学習指導要領に則った教育・授業ができる先生をぜひとも採用していただきたい。市長は県知事との会に色々出席されていると思うので、ぜひ市長の立場で要望を続けていただけると有難い。よろしく願いたい。

市長

教員不足解消に向け、最大限努力したい。子どもたちが学校で元気に生活するには、学校の先生方が元気にならないと始まらないので、先生方に対するサポートがとても大切だと感じている。教員が不足している原因はいくつかあり、それらを一つ一つ減らす努力をするのが行政の役割だと思っている。そして、先生方が働きやすい環境を、行政として作り上げる必要がある。そのために、市民の皆様にもご協力をお願いしたいと考えている。

教育長

今日の会議で市長の考えを伺い、「西条の子どもたちの教育環境がより良くなるために、大人ができることをやる」という強い思いを感じた。それに関しでは、私も同様の思いでいる。今ここにいる4人の教育委員も同じ気持ちである。今日の話の中では、もう少し内容を詰めていかなければいけないところもあったが、西条の教育をより良いものとしていくため、引き続き市長部局と教育委員会が連携して、地域の声を聞きながら検討を進めていきたいと思う。西条の子どもたちのため、引き続きよろしくお願いしたい。

市長

ありがとうございます。「すべては子どものため」ということを念頭に置いて進めていければと思う。将来に向けてどのような教育環境を目指せば、子どもたちにとって幸せな人生につながっていくのか、今後も真剣に考えていきたい。